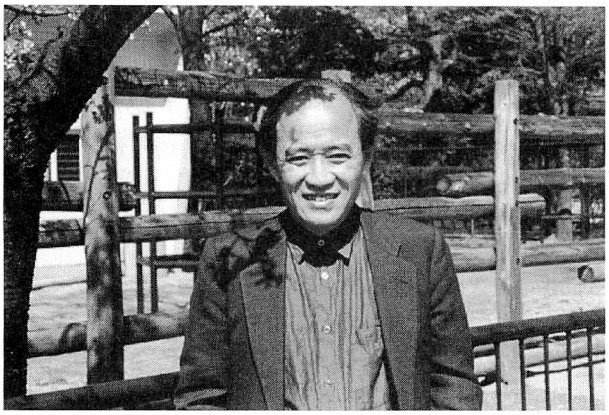
Japanese Journal of Applied Psychology
2006, Vol. 32, No. 1, 47–52

追　悼

田中昌人教授
—平和・安全・発達保障の学問への志—

京都大学　田 中 真 介



田中昌人先生
京都市動物園の桜の木の下で．1990 年春．

日本応用心理学会において常任理事及び会長としてご指導いただいた田中昌人教授が，2005 年 11 月 18 日に滋賀県大津市にて逝去された。73 歳 9 か月 26 日のご生涯であった。先生はこの数年，新たな病を得てのちも，病と共に生き，ご研究の手を緩められることはなかった。その年の 10 月 22 日にも，京都の龍谷大学で開催された「第 1 回関西圏大学教職員『教育・研究フォーラム』」において，関西の大学の先生方や職員の方々を前に基調講演をされていた。

先生は，ご家族のことを考慮されて，ご自身の訃報を広く知らせることを控えるよう，ご家族にも身近な方々にもお申し付けられ，知らせは 1 か月伏せられた。最後の最後まで手のかかる，要望の多い，温かい，自分のことはさておいて人のことばかり思いやられる先生だった。

1.　少年の夢　—平和への願い—

先生は，1932 年 1 月 22 日に東京にお生まれになり，その後，小学校 3 年生までの 7 年間を信州松本で暮らされた。「体が弱くて，動作がのろく，泣きみそで，一人ぽっち」だった昌人少年は，小学校を年中休んでいたという。たまに登校するが，担任の先生にあてられても返事ができず，しくしく泣いてばかりだったので，順番に本を読む時にもとうとう飛ばされるようになり，4 年生では特別学級入りを告げられる。

しかし，休日に父や母と一緒におおばこを抜き，土深くたんぽぽの根を掘るのを手伝い，その穴を埋め，土を叩いて固めていった。体を使って仕事を担い，役割をもらい，それを一生懸命に果たそうと努力する中で，もの言わぬ少年に大きな変化の兆しが現れ始めた。

1941 年，4 年生から徳島に転居され，特別学級入りを免れる。温暖で穏和な気候の中で暮らして，みんなの仲間に入り，子守や薪割り，草むしりなど，人の役に立つことが少しずつできるようになった。夏には，海水浴場まで歩いて通って水泳をした。「10 歳という人生の節目におけるこうした毎日の小さな冒険の積み重ねが大きな初体験となって心身を解放してくれた」と述懐されている。

1944 年には国民学校初等科を修了された。戦争は激しくなり，食糧事情がどんどん悪化していった時期である。岡山へ疎開され，命からがら終戦を迎えられた。「戦争は，その黒い爪先を母や子ども，老人といった銃後の弱い者向け，その弱点に否応なく襲いかかる」ということ，戦争による犠牲者が兵士でなく，子どもたちや市井の人びとであることを肌身で感じられた。その経験によって先生は，戦争廃絶の必要性を市民の立場から繰り返し粘り強く訴え続けられ，人類の発達を保障するために必要なことそれ自体を研究課題とされることとなる。

1945 年の敗戦後の 10 月，旧制清水中学へ編入後，1948 年には学制改革で新制高校 2 年に編入され 1950 年に卒業された。塩田で塩を作ったり，野菜畑を耕したり，漁師の網引きを手伝い，新聞配達をして，大人の役に立つ仕事を担うことを通して，どんな苦労もいとわない青年が育っていくことになった。

2. 発展するもの考えあり　―発達保障思想の萌芽―

先生は，1950 年（昭和 25 年）に京都大学教育学部に入学され，宇治分校に通われた。分校は，陸軍大阪砲兵工廠宇治火薬製造所の跡地にあり，そこに建つ耐火煉瓦倉庫群が学舎だった。入学後すぐに先生は，『発展するもの考えあり』という標題を記したノートを作り，冒頭に「教育学をやろう」との決意を書き記された。自分にとっての真物（ほんもの）の学問とは，生きている社会の問題を捉え，それを解決していく学問ではないか，と自分に問いかけられている。

1952 年（昭和 27 年），3 回生のときには，京都木幡の医療少年院へ通われた。そこには，疾病や障害を持ち社会的に適応できずにいる少年少女たちが大勢いた。毎回ひとり一人と面接して彼らの願いを読み取る中で，先生は社会の側の問題を強く意識されるようになる。ノートには，「…この子たちは人間の欠陥などではない」「すべての人を人間としてみること」「成功，失敗のレッテルを貼るような評価を行ってはならないこと」と記されている。このときに得られた子どもたちへの眼差しは，その後，知的障害をもった子どもたちのための養護施設，近江学園に勤務されることを経て，発達保障の思想として築き上げていかれることとなる。

この年の秋，先生は，教育心理学演習の現地実習として，滋賀県信楽の信楽寮を訪ねられた。近江学園の糸賀一雄園長が施設内を案内して下さり，近江学園生徒が実際に陶器作品（汽車土瓶）作りをしている場面を見学させて下さったという。糸賀一雄先生と田中昌人先生との最初の出会いである。糸賀先生はこのとき，田中昌人先生らに作業中の生徒の眼を観察するようにと言葉をかけられた。

3 回生の夏休みには，「今日の教育の見落としている面，即ち健康教育の成り立つ場について」をテーマとして，遺伝と環境の関係を発達的に取り上げて教育の体系をまとめることを志され，「胎教の歴史的変遷」についての文献研究に着手された。『日本医学史』(1941) の著者，富士川游が寄贈した『富士川文庫本』九千冊の中に，胎教の教えに関する記述がある。先生はそれをひたすら筆写し，4 回生で『胎教の歴史』と題した論文をまとめられた。卒業論文，『新胎教の可能性と展開上の諸問題』の前半の論文となったものである。

当時の産科学の成書には，妊娠中毒症が，原因が未解明で治療法が未確立であり，医学における三大疾患のひとつであること，そしてその予後として，産児が知的障害になると記されている書が少なくなかった。しかし，妊娠中毒症の母親から生まれた産児を追跡調査した研究はなかった。それまでの医学研究では，知的障害をもつ子どもが遡及的に調べられ，その子たちの母親が妊娠末期に妊娠中毒症が含まれている場合がある，ということから類推して，妊娠中毒症が知的障害の原因であると結論づけられていた。

そこで先生は，妊娠中毒症が出生児の成長発育に及ぼす影響を厳密に明らかにするために，京大病院の産科のカルテ室で，1935 年から 1944 年まで 10 年間に京大病院で分娩した産婦 13,592 事例のカルテを精査された。4 回生の時の初夏から秋にかけての 4 か月を費やされている。妊娠中毒症の産婦が 491 名，そのうち子どもが生存している場合が 334 名を見出し，その中で京都市に在住している 78 名の家庭を先生は一軒一軒自転車で訪ねられ，52 名について完全な資料を得て分析にかかられた。

その結果，妊娠中毒症を経過した母親から生まれた子どもと，同じ母親から妊娠中毒症を経過せずに生まれた年齢の近いきょうだいとの 1 対 1 対応において，知的障害などの発生率が高いという有意な結果は認められなかった。母親の妊娠中毒症が出生後の知的発達障害と因果関係があるとは言えないとの重要な結論が得られることになった（『発達研究への志』，1996）。

知的障害の最も大きな隠された「原因」は，母親の疾病経験でも子ども個人の脳の機能障害でもなく，社会構造そのものの中に潜んでいる。それこそが解明されなければならない。それは障害を持つ子どもたちだけでなく，すべての人間の発達を阻んでいる目に見えない透明の壁でもあった。その真の敵にこそ一直線に学問の矢を打ち放つ必要がある。近江学園での療育実践と研究とが力強い弓となり，「可逆操作の高次化における階層-段階理論」が鋭い矢としてその弓につがえられた。

3. 近江学園の子どもたちとともに　—可逆操作の発見—

先生は，1954 年（昭和 29 年）に卒業されたあと，京都大学教育学部の助手として勤務された。その後 1956 年（昭和 31 年）4 月には大津市立南郷中学校・近江学園分校（精神薄弱児施設「近江学園」）に教諭として赴任され，研究室主任となられた。以後 13 年間，学園内の職員宿舎に住み込んで，療育実践と研究活動を続けられた。

近江学園の子どもたちの綿密な発達診断と縦断観察から，発達の過程で主導的な「可逆操作」の様式が充実し高次化することによって初めて人間の全面的な発達が実現していく，ということが見出されていった。「可逆操作」がしっかりと獲得されない場合，発達段階の移行が困難になることが確認されている。これは，知的発達障害の最も基本的な機構が解明されたことを意味する。

近江学園の子どもたちは生活年齢ではすでに児童期から思春期以上の年齢段階に入っていたが，「1 次元可逆操作」の獲得に援助を必要とする児童たちが少なくなかった。通常 1 歳 4〜6 か月に達すると，次の二つの発達検査課題は，半数以上の子どもたちが完全に達成できる。一つは「積木を三つ重ねる」課題，もう一つは，はめ板を使った「円板回転」課題である。

円板回転課題は，「□，△，○の形がくり抜かれた長方形の基板を子どもの前に提示し，利き手が○の外側の位置に来るようにする。そして，○の形の中に，まず円板を入れさせる。その上で次に基板を子どもの目の前で左右 180 度回転させて，□の孔が子どもの利き手側に位置するように置いて，再び円板を入れさせる」という課題である。

この同じむずかしさのはずの二つの問題が，知的発達障害を持つ児童たちでは，むずかしさが異なってくる。近江学園の児童たちは，積木を重ねる課題は通過しても，ほとんどの子どもで円板回転の課題がなかなか通過できず，この課題で何年にもわたってもつれが続いた。したがって，この円板回転課題を達成するための基礎となっている発達的な力量が，知的発達遅滞を引き起こす機制と関係が深いと考えることができる。

近江学園の児童たちは，円板回転課題そのものに限らず，生活の中で次のような傾向が観察された。「右のものが左へ，上のものが下へ，前のものが後ろへと，どういう方向であれ，外界が 180 度の回転をしたとき，それに即してなめらかに，あるいはのびやかに外界をうけとめ，それをエネルギー源として，自らのやりかたを，その変化に応じて変えることができにくい。…鉛筆で線を描かせた時，中から外へ描いた場合に，次に逆に外から中の方へ描かせようとすると，前と同じように中から外へ描く。あるいは食事で，いつも坐る場所をいつもと変えると，もう坐るのに強い抵抗がある。…変数は一つであるが，それを主体的に受けとめて操作することができにくいのである。状況が変化しても，変わる前と同じやり方をしてしまう」（近江学園年報，11, 1965 より要約）。

1 歳半ばの発達の節目で，子どもたちは，この 1 次元可逆操作につまづきやすいこと。また，その 1 次元可逆操作のつまづきを示す子どもたちは，「変数はひとつであるが，それを主体的に受けとめて操作することができにくい」ことが示された。「円板回転課題」に見られるような表面的な行動の獲得だけにつまづいているのではないのである。そしてさらに，「主体性の形成」すなわち「自我の形成」が 1 次元可逆操作の獲得に不可欠であるという重要な指摘がなされていた。

「…食事の場面で，ふだんは何も手を出さない子が，ご飯をわしづかみにする。行動が屈折しない子が，食べ終わったらそれが（次の）行動の源泉になって，自ら次の他の行動であるお代わりを求めて茶碗を出す。質的に違う行動が接点をもって 1 次元的に可逆しているのである。このように 1 次元の直線的行動が強まり，持続し，他の行動と結節し，可逆する」。子どもたちの何気ない行動の発達的な意味が読み解かれていく。

1 次元可逆操作期のつまづきの機構をこのように捉えることができると，療育の場面では，子どもたちの 1

次元世界の主体的操作の特徴を，心のふくらみ，ゆたかさをもたせる方向でさらに動かしたり，おきかえたりしてみる，という実践が構想されることになる。「…食事へのつよい主体性の発露に抵抗を加え…，わしづかみする子の手に触れてみたり，意図的に机から離して坐らせてみる」。

「主体性がつよく発露される場での行動を，強くみじかくから，“間”をもたせ，それを充実させることによって強くひろがりをもたせる方向へかえていくのである。それは1次元世界の力強いひろがりへのはたらきかけである。さらにまた，はなれたところへの主体性の発露をもたせながら，まっている間に他の動作ができるというしかたではたらきかける。そして，まつことが，役割の遂行や調整，交代というひびきあういとなみをとおして，その中で主体的に自己が実現していくというものにしなければならない。そうでないと発達にはたらきかける指導ではない」。

「可逆操作」は，1歳半ばだけでなく，発達の各段階に成立していることが発見され，それが，人間の発達を主導する不可欠の活動の様式として，「外の世界をとり入れて新しい行動をつくりだし，そうすることによって自分の内面を豊かにしていく営み」であり，同時に，「発達を主導するために必要な質的規定性と量的規定性をもった基本単位」をもった活動であることが見出されていった。

発達研究・教育学研究へ可逆操作の概念が導入されたことによって，障害の有無にかかわらず広くすべての子どもたちの発達を保障するための保育・教育・療育の課題が，新たな観点から提起された。特に，可逆操作の内的な推進力，及びそれによって形成される個体の機能を「可逆操作力」として捉え，それを実現するための外的・社会的な諸条件を「可逆操作関係」と捉えることで，個体がその発達を実現するための諸条件が，現在の力をもとにしてどのような諸関係の中で実現されてくるのかを分析し解明できるようになった。子どもたちの，そして広くすべての人たちの発達を真に支えるために，教育は，社会はどうあるべきなのか。その内容まで新たに提起できる発達理論が，こうして生まれることになった。

先生は，1970年に京都大学教育学部教育指導講座に着任された。「…発達は，活字や写真からでは一切わかりません。年間1,000人に相当する子どもたちを見て初めて子どもが見えてくる」。「オリの中のライオンを研究して“ウロウロしてる”と結論していませんか？　オリを取ったら走り出すんです」。「子どもたちが互いに尊敬し，信頼し，期待しあっている姿を見てください」。子どもたちを，そして，教育実践の現場を尊重する姿勢が鮮明であった。大学院生への研究指導では真理・真実が唯一の基準とされ，論文はそこからの距離が厳密に評価された。修士論文の提出締切り数日前に，先生から笑顔で「イチからやり直しですね」と言われた院生が何人いたことだろう。その言葉の温かさに気づくのは何年もあとになってからだった。

4.　日本応用心理学会を支えて

先生は，日本応用心理学会において，1997年度から2002年度まで常任理事を務められた。また，1997年（平成9年）に副会長，翌年1998年には会長の任にあたられ，同年9月5日～6日に龍谷大学大宮学舎で開催された第65回大会で，大会準備委員長を務められた。さらにその後は，2002年2月2日からは学会の倫理綱領を作成する委員会の委員長として，世界中の学会や諸機関の倫理綱領・倫理規程の案文を取り寄せて検討され，本学会の倫理綱領の草案づくりに力を尽くされた。

日本応用心理学会第65回大会で，先生は，会長報告として，『「可逆操作の高次化における階層-段階理論」の新しい局面』と題して講演され，人間の発達に関する最新の研究成果を示された。それぞれの階層での「新しい発達の原動力」の生成と萌出には五つの過程があること，それに基づいて発達障害をその原動力の生成の困難として把握する必要があること。そしてそれらを科学的根拠として，「…相談支援機関における応用心理学が，単なる程度別類型判定をして終われり，とすることを克服して療育支援を行い，その効果を科学的に評価することによって社会的責任と説明責任を果たしていくことができる」と提起された。

学会誌『応用心理学研究』に先生は，「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して―2050年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考―」と題した重厚な総説論文を寄せられた（応用心理学研究，27-2, 2001）。そこには，国際情勢の綿密な分析をもとに，それに対する国際連合の取り組みに関する広範な資料が検討されている。21世紀を見通して50年以内に生じる可能性の高い諸問題が的確に予測されるとともに，解決のための基本原則と具体策，及び応用心理学の課題が提起されている。

この論考の中で，人類の発達に最も重大な影響を与えるものとして，まず人口の変動によって発展途上国に人口増加による環境破壊，発展過剰国では労働力不足・少子高齢社会の諸問題が必然的に生じることが指摘され，発展途上国や日本における新たな貧困問題，諸資源の不足による生活基盤の揺らぎ等の諸問題の解決の取り組む必要のあることが示された。それらの諸問題に対して，「国際的視野で問題を捉え，解決し，人間が生産労働によって人格価値をつくり出して人間的貧困を克服してきたことを科学的に捉えて，応用心理学が研究面からも説明責任を果たしていく課題がある」と強調されている。また，環境汚染が人間の生命と発達を蝕んでいる深刻な現状が資料によって示されるとともに，それらの根本的な原因になっている戦争と核兵器の廃絶と犠牲者の救援の必要性が示された。

「問題解決を進める際の基本的原則」として，1) 共進化の機制を攪乱しないこと，2) 生成の原動力に焦点づけた資源の利用と全サイクルシステムを構築すること，3) 民主的な自治と連帯・共同によって平和・安全・発達保障を実現すること，が提起され，実現のためのプログラムが検討されている。そして最後に，「平和・安全・発達保障の礎」として，人類史的な問題に取り組み解決していくための学問の課題と研究のあり方が提起され，後世に託された。

【田中昌人先生の経歴及び業績の概要】

○専攻分野と研究領域

先生の専攻分野は教育指導論，発達診断学，発達保障論，障害者教育学，生涯発達心理学，教育心理学。

発達における内的合法則性の解明を志し，「可逆操作の高次化における階層-段階理論」を構築された。常に生活の現実の問題，教育現場の実践の課題の中で理論を洗練することを目指しておられた。この発達理論は，今日の保育・教育・療育の実践に，事実に基づいた科学的な根拠を与えている。

田中昌人先生のご研究は，主として，相互に関連しあう次の５つの領域から構成される。

(1) 発達の基礎理論研究　…可逆操作の高次化における階層-段階理論の構築。霊長類乳幼児の発達比較研究など。

(2) 発達診断学研究，障害療育実践及び保育・教育方法の研究　…障害をもつ乳幼児・児童・青年・成人・高齢者の発達調査研究など。

(3) 発達保障の理論的研究　…可逆操作特性に基づく教育階梯論。教育制度論，社会保障政策論，自治体の障害乳幼児政策論。発達保障の国際動向研究など。

(4) 公害被害・医療被害に関する調査研究　…森永ヒ素ミルク中毒事件，予防接種健康被害事件など。

(5) 発達の概念の生成過程に関する研究　…蘭学における発達の概念の導入過程など。

○職歴及び所属学会

1954 年（昭和 29 年）に京都大学教育学部を卒業後，同大学教育学部助手を経て，1956 年（昭和 31 年）より滋賀県大津市立南郷中学校（近江学園分校）教諭。1958 年（昭和 33 年）より大津市の乳幼児健診相談活動に参加。1964 年（昭和 39 年）より滋賀県立近江学園指導係長として勤務された。1967 年（昭和 42 年），全国障害者問題研究会が結成され，その初代の全国委員長に就任された（1981 年まで委員長，以後顧問）。

1970 年（昭和 45 年）に京都大学教育学部助教授として着任された。1983 年（昭和 58 年）に教授。1995 年（平成 7 年）に定年退官された。その後は 1996 年（平成 8 年）から 2003 年（平成 15 年）まで龍谷大学文学部教授，同大学大学教育開発センター・センター長を務められた。

所属学会・団体は，日本応用心理学会（元会長，その後常任運営委員・常任理事）のほか，大学評価学会（共同代表），日本教育学会，日本心理学会（評議員），日本教育心理学会，関西教育学会，関西心理学会，日本霊長類学会，全国障害者問題研究会（初代全国委員長，のちに顧問），人間発達研究所（所長），教育目標・評価学会（理事），教師教育学会など。

○おもな著書・学術論文

田中昌人「新胎教の可能性と展開上の諸問題」京都大学教育学部卒業論文，1954（『発達研究への志』所収）.

田中昌人「精神薄弱児用テストの作成 1, 2」近江学園年報，第 8 号，pp. 182-211, 1958.
田中昌人「研究部のあゆみ」近江学園年報，第 9 号，pp. 213-245, 1960.
田中昌人「精神薄弱児指導技術の組織体系化に関する研究」近江学園年報，第 10 号，pp. 108-118（第 1 教育部），pp. 187-197（第 2 教育部），pp. 247-254（第 3 教育部），pp. 261-296（これからの指導の深まりのために），1964.
田中昌人「研究部報告」近江学園年報，第 11 号，pp. 94-105（第 1 教育部），pp. 275-290（第 2 教育部），pp. 349-370（第 3 教育部），pp. 371-400（これからの指導の深まりのために），pp. 424-451, 1965.
田中昌人・田中杉恵「精神薄弱児の発達」近江学園研究室（「愛護」76 号～100 号への連載論文の合本），1966.
田中昌人「精神薄弱児の類型学的研究をすすめるにあたっての方法論的問題点」児童精神医学とその近接領域，1 巻 4 号，pp. 412-417, 1960.
田中昌人・田中杉恵「「精神薄弱児」研究の方法論的検討」心身障害福祉問題研究叢書，2, 1966（冒頭論文の初出は田中昌人，1960. 他の論文は田中昌人・田中杉恵，1966 に基づく）
田中昌人「講座　発達保障への道」①②③，全国障害者問題研究会出版部，1974.
田中昌人「人間発達の科学」青木書店，1980.
田中昌人・田中杉恵・有田知行（写真）「子どもの発達と診断」1-5，大月書店，1981-88.
田中昌人「人間発達の理論」青木書店，1987.
田中昌人「発達研究への志」あいゆうぴい（萌文社），1996.
田中昌人「発達保障論の経緯と国際的動向」近江学園創立 50 周年記念誌「消シテハナラヌ世ノ光」pp. 88-112, 1996.
田中昌人「全国障害者問題研究会の結成と私の発達保障論」全国障害者問題研究会編「全国障害者問題研究会三十年史」全国障害者問題研究会出版部，pp. 439-575, 1997.
田中昌人（監修）「日本応用心理学会第 65 回大会発表論文集」1999.
田中昌人「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して　―2050 年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考―」応用心理学研究，27-2, 2001.
田中昌人「発達の土割」あいゆうぴい，2001.
田中昌人ほか「あの頃の子どもたち　―五十年後から見た戦中戦後の教育体験―」クリエイツかもがわ，2002.
田中昌人「障害のある人びとと創る人間教育」大月書店，2003.
田中昌人ほか「あの頃の大学生たち　―戦後激動の「改革期」を生きる―」クリエイツかもがわ，2005.
田中昌人「日本の高学費をどうするか」新日本出版社，2005.

○おもな学術記録映画作品とその解説書

田中昌人（制作委員長）「映画　夜明け前の子どもたち」国際短編映画社，1968.
田中昌人・田中杉恵（監修）「映画　光の中に子どもたちがいる」全 3 巻，綜合社，1976-1977.
田中昌人・田中杉恵（監修）「スライド　子どもの発達と診断」全 5 巻，大月書店，1983-1991.
田中昌人・田中杉恵（監修）「ビデオ　発達診断の実際」全 8 巻，大月書店，1993-2003.
田中昌人・田中杉恵（監修）「ビデオ　あそびの中に見る子どもたち」全 9 巻，大月書店，1993-2003, 2005.

（2006 年 10 月 19 日　田中真介）